

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 26 日現在

機関番号：62608

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2010～2014

課題番号：22242010

研究課題名(和文) 日本古典籍における【表記情報学】の基盤構築に関する研究

研究課題名(英文) The project for establishing the foundations of "Methodology for the studies of the notation" in the classical Japanese literature

研究代表者

今西 裕一郎 (IMANISHI, Yuichiro)

国文学研究資料館・館長

研究者番号：90046219

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 36,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、『源氏物語』における写本の単語表記という問題から、さらに大きな日本語日本文化の表記の問題を浮かび上がらせることとなった。当初の平仮名や漢字表記の違いというミクロの視点が、テキストにおける漢字表記の増加現象、またその逆の、漢字主体テキストの平仮名テキスト化という現象へと展開する過程で、テキストにおける漢字使用の変貌も「表記情報学」のテーマとなることが明らかになった。「文字の表記」は「文化の表記」「思想の表記」へとつながっている。「何が書かれているか」という始発点から「如何に書かれているか」に至る「表記情報学」は、今後も持続させるべき「如何に」の研究なのである。

研究成果の概要(英文)：This research issue focusing on the word notation in manuscripts of "The Tale of Genji", revealed the bigger issue of notation in Japanese language and Japanese culture. Though we had micro view point at first, which featured on the difference between HIRAGANA and KANJI notation, on the process of expanding the range of view, from the mere difference to Kanji notation increase phenomenon in text, also to Hiragana notation increase phenomenon in Kanji-led text on the contrary, it showed that change in using Kanji in text also can be the subject of "methodology for the studies of the notation". "Notation of the letter" leads to "notation of culture" and "notation of philosophy". "Methodology for the studies of the notation", which observes not only "what is written" as a start point but also "how it is written" is the actually research of "how", which we should continue to study.

研究分野：国文学

キーワード：国文学 表記情報学 本文研究 源氏物語

## 1. 研究開始当初の背景

『源氏物語』をはじめとする、平安時代仮名文の作品は、漢字使用を避け、すべて「女手」とよばれた仮名で書かれていた。しかし、伝本の書写過程においては、書写、解読の両面から、漢字表記による合理化が徐々に進行し、今日一般の古典テキストに見られるような漢字仮名交じりの表記体が採用されるようになった。『源氏物語』の場合も、物語が書き記された平安時代から、すでに内容や表記を異にするいくつもの写本が書写伝承されている。それらの本文については、『源氏物語大成 全8巻』(池田亀鑑編、昭和28～31年、中央公論社)や『源氏物語別本集成 全15巻』(伊井春樹・伊藤鉄也・小林茂美編、平成元～14年、おうふう)・『同続 全15巻』(同編、平成17～刊行中、おうふう)の翻字を通して確認できる研究環境が整っている。

しかし、従来の古典本文研究は、もっぱら異文研究として行われてきた。『源氏物語』においても、いわゆる青表紙本・河内本・別本間の異文、あるいは各系統内での異文の検討が精力的になされてきた。ただし、その成果は異文の多様性の指摘にとどまり、それぞれの異本の性格を規定する決め手を欠くという行き詰まりを呈している。

本研究では、従来の異文研究の成果を継承しつつも、「表記」に注目することにより、『源氏物語』本文に対する視点を変え、『源氏物語』本文に対する新たな分析を試みる。これまで「表記」研究が重視されてこなかったのは、表記が異なっても意味は同じだろうという常識的判断に加え、『源氏物語』研究の金字塔とも言うべき池田亀鑑の『源氏物語大成校異篇』が、諸本の異文を掲出するに際して、その凡例で「諸本トノ間ノ漢字ト仮名トノ相違ハ之ヲ掲ゲナカツタ」と述べたように、漢字か仮名かという表記情報を一切不問に付したことの影響が大きかったと思われる。

しかし、表記が開示する情報は無視できない重要性をはらんでいる。一例をあげれば、大島本『源氏物語』では、一般には「あはれ」と仮名表記される千を超える「あはれ」という語が、わずか22例のみ「哀」の漢字で表記されている。この極端な表記の偏りだけでも問題視に値するが、さらにその22例中の16例までが明石巻に集中しているのである。この事実は、従来、飛鳥井雅康一筆の揃い本と目されてきた大島本の認識に、一石を投ず

る重大なデータである。

このような事例はまだ数多く『源氏物語』本文中に眠っており、そのような「表記情報」としてのデータを収集し、複雑に交錯するそれらのデータを統計学の計量分析によって分析することにより、従来目に見えなかった『源氏物語』伝本の様相が浮かび上がることが期待される。

なお、平成21年10月より、当館と同じ人間文化研究機構所属の国立国語研究所において、「仮名写本による文字・表記の史的研究」(萌芽・発掘型、平成21年度～平成23年度、7,500千円)がスタートした。これは、古写本に書かれた日本語資料としての変体仮名の字母を研究対象とするものであり、本研究とは異なる観点に立つ研究である。しかし、表記という情報に焦点を絞るという基本的なレベルでは共通の認識に立脚しているものである。国立国語研究所のプロジェクトと本申請課題は、お互いが連携してより豊かな成果が得られるように、研究者の配置とテーマの設定に配慮をしている。国立国語研究所のプロジェクトのリーダーである斎藤達哉氏が本申請課題の連携研究者として加わり、本申請課題の研究分担者である伊藤鉄也氏が国立国語研究所のプロジェクトに主要担当者として参加している。機関および志を同じくする研究者の連携により、さらなる充実した成果が期待できるはずである。

## 2. 研究の目的

本研究は、『源氏物語』諸本のテキストを、ある語を仮名で書くか漢字で書くかという、「表記」の観点から見直し、諸本間における表記態度の差異、また同じ本の巻々相互間の表記の差異に注目し、外部徴表ではなく本文内部のデータを基にして、伝本全体、あるいは同一伝本内の巻々の性格、素性の分析を試みるものである。

仮名で書くか漢字で書くかという表記の相違は、本文の意味情報としては必ずしも重要ではない。それゆえ表記問題は従来等閑視されてきた。しかし、表記情報はテキストの書写関係ならびに同一伝本内での巻々の素性に関して、きわめて重要な要素である。

本研究ではこの点に着目し、データ化されたテキストによって様々な表記情報を集約し分析して、『源氏物語』をはじめとする日本古典文学の本文研究に新たな局面を拓こうとするものである。

### 3. 研究の方法

研究代表者今西は、すでに統計数理研究所における共同研究で『源氏物語語彙用例総索引』（「自立語篇」全5巻、「付属語篇」全5巻）およびそのデータベース版を作成した。そのデータベース版は、『源氏物語』の語彙を計量分析するために作成した品詞コード付本文を、データベースを用いて、前後10語程度の文脈つき索引(KWIC)として出力するものである。

本研究は「表記」に注目することにより、表記情報の分析に取り組む。さらに古写本、古活字版、版本などの翻字とデータ化もあわせて行う。【表記情報学】という観点から、新たな諸伝本研究の資料集成としてのデータベースを構築する。

この本文データベースに基づき、統計学の計量分析にかけることにより、従来見えなかった『源氏物語』伝本の様相を浮かび上げることが可能となる。

### 4. 研究成果

(1) 平成22年度は、まず国文学研究資料館蔵『源氏物語』正徹本54巻の本文をデータベース化し、全54帖の画像撮影を行った。正徹本をデータベースの基盤とし、それを有効に活用しながら、さまざまな語における漢字表記、仮名表記を抽出し、表記情報に関する本研究課題を進展させていくための基盤作業に取り組んだ。

また、研究集会は年3回(4月・9月・10月)実施し、4・10月は、本科研のメンバー内での情報交換の場を持ち、各自の成果を発表した。9月には國學院大學において、「源氏物語本文研究の新たな流れ」と題して、国内の『源氏物語』本文や表記情報学に関わる研究者との大々的な意見交換の場を設け、研究の成果・討議を行った。

(2) 平成23年度は、正徹本(国文学研究資料館蔵、全54巻)の全巻全丁の画像と、文節に切った本文とその語を含む写本の当該画像の相互検索・表示が可能なデータベース化を完成させた。印刷物として発行した研究成果報告書には、この正徹本の本文と画像を収録したDVDを付した。

正徹本の本文と画像のデータベースを基盤として、これを有効に活用しながら、さまざまな語における漢字表記、仮名表記を抽出し、表記情報に関する本研究課題を進展させ

ていくための基盤が用意されたことになる。

研究会は、当初は年3回の予定であった。しかし、研究成果の進展が顕著であったために、計4回(5月・9月・12月・3月)開催した。各回3～4人の研究発表があり、活発な議論と有意義な情報と意見の交換がなされた。それらは、研究成果報告書に収録されている。

(3) 平成24年度は、合計3回(5月、8月、2月)の研究会を国文学研究資料館において実施し、各回4人の研究発表をもとにして有意義な討議を重ねてきた。また、平成24年9月24日には、イタリア・フィレンツェ大学文学部コンファレンスルームを会場として、「日本古典籍における【表記情報学】」と題して国際研究集会を開催した。6人の研究発表の後、活発なディスカッションを行った。その詳細は2012年度報告書(第2号)に「国際研究集会編」として収録した通りである。

研究遂行上必要となるテキストとしての翻字本文の作成と、そのデータベース化も、引き続き行った。平成24年度は源氏物語の版本「絵入源氏物語」「九大古活字版源氏」等に関して作業を行った。「絵入源氏物語」は翻字データの編集を完了し、全本文をデータベース化した。さらに全巻全丁のカラー画像も整理し、文節に切った本文とその語を含む写本の当該画像の相互検索・表示が可能なデータベース化を、前年度の正徹本と同様に完成させた。印刷物として発行した研究成果報告書には、この「絵入源氏物語」の本文と画像を収録したDVDを付した。

(4) 平成25年度は、合計3回(5月、8月、2月)の研究会を国文学研究資料館において実施し、各回4～5人の研究発表をもとにして有意義な討議を重ねてきた。

研究遂行上必要となるテキストとしての翻字本文の作成と、そのデータベース化も引き続き行った。平成25年度は、新しく国文学研究資料館の所蔵となった『源氏物語』(榊原本、全16冊)の翻字に取り組み、研究成果報告書に添付したDVDにその翻字データなどの諸資料を収録した。この写本は長らく所在不明となっており、『源氏物語大成』所載の翻字本文と一部の巻の影印が知られるのみであった。それが平成23年3月に国文学研究資料館の所有となったため、これを本科研で全16冊を翻字し、貴重な鎌倉時代の古写本本文をあらためて公開することに

したものである。この成果は、【表記情報学】の構築や『源氏物語』の研究に資するものとなる。

(5) 最終年度となる平成26年度は、これまでの研究活動の集大成として9月26日にカナダ・プリティッシュ・コロンビア大学において国際研究集会を開催した。国際研究集会では各人の問題意識を反映した発表とそれに対する活発な議論が行われ、有意義な学术交流となった。その詳細は2014年度報告書(第4号)に「国際研究集会編」として収載した通りである。

また、国文学研究資料館と学术交流協定を締結している実践女子大学が所蔵する山岸徳平文庫『伝明融等筆 源氏物語』全44巻を翻字した。それに加え、東海大学蔵桃園文庫影印叢書第1、2巻『源氏物語』(明融本)に収められている9巻分についても、同様に翻字を行った。この成果は、報告書(第4号)付属のDVDに収めている。【表記情報学】という観点から、新たな諸伝本研究の資料集を構築する上で、基盤整備の一助とすることができた。

研究会は、合計3回(6月、8月、2月)国文学研究資料館において開催し、各回5人前後の研究発表を得て有意義な討議を重ねてきた。

なお、ホームページ「日本古典籍における【表記情報学】の基盤構築に関する研究」(<http://genjiito.org/ima/>)で、本科研のこれまでの活動内容と研究成果を公開している。



## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)(報告書掲載分のみ)

相田満、古事類苑編纂室本『河海抄』推定稿、『日本古典籍における【表記情報学】の

基盤構築に関する研究4』、査読無、4巻、2015、13 - 37

今西祐一郎、嵯峨本の表記 試論 平家物語の場合、『日本古典籍における【表記情報学】の基盤構築に関する研究3』、査読無、3巻、2014、11 - 31

伊藤鉄也、『和泉式部日記』の本文異同、『日本古典籍における【表記情報学】の基盤構築に関する研究3』、査読無、3巻、2014、33 - 59

野本忠司、源氏本文のネットワーク分析、『日本古典籍における【表記情報学】の基盤構築に関する研究1』、査読無、1巻、2012、117 - 120

〔学会発表〕(計6件)

上野英子、伊勢物語と【表記情報学】『伊勢物語の歌絵』を軸として、日本古典文学の可能性と異文化の交響、2014年9月26日、バンクーバー(カナダ)

伊藤鉄也、『蜻蛉日記』の表記情報 傍記が本行本文に混入すること、日本古典文学の可能性と異文化の交響、2014年9月26日、バンクーバー(カナダ)

中村一夫、仮名文テキストの文字遣 鎌倉から江戸の源氏物語を通覧する、日本古典籍における【表記情報学】、2012年9月24日、フィレンツェ(イタリア)

伊藤鉄也、『和泉式部日記』の文字表記、日本古典籍における【表記情報学】、2012年9月24日、フィレンツェ(イタリア)

坂本信道、写本における「无」文字消長 藤原定家自筆本を中心に、2012年9月24日、フィレンツェ(イタリア)

今西祐一郎、表記情報学としての平仮名本と片仮名本、日本古典籍における【表記情報学】、2012年9月24日、フィレンツェ(イタリア)

〔図書〕(計4件)

今西祐一郎編、国文学研究資料館、日本古典籍における【表記情報学】の基盤構築に関する研究4、2015、228

今西祐一郎編、日本古典籍における【表記情報学】の基盤構築に関する研究3、2014、148

今西祐一郎編、日本古典籍における【表記情報学】の基盤構築に関する研究2、2013、132

今西祐一郎編、日本古典籍における【表記情報学】の基盤構築に関する研究1、2012、120

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページ等

「日本古典籍における【表記情報学】の基盤構築に関する研究」

<http://genjiito.org/ima/>

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

今西 裕一郎 (IMANISHI, Yuichiro)  
国文学研究資料館・館長  
研究者番号：90046219

### (2)研究分担者

伊藤 鉄也 (ITO, Tetsuya)  
国文学研究資料館・研究部・教授  
研究者番号：10232456

野本 忠司 (NOMOTO, Tadashi)  
国文学研究資料館・研究部・准教授  
研究者番号：20321557

江戸 英雄 (EDO, Hideo)  
国文学研究資料館・研究部・助教  
研究者番号：50290870

相田 満 (AIDA, Mitsuru)  
国文学研究資料館・研究部・准教授  
研究者番号：00249921

海野 圭介 (UNNO, Keisuke)  
国文学研究資料館・研究部・准教授  
研究者番号：80346155

### (3)連携研究者

加藤 洋介 (KATO, Yousuke)  
大阪大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：00214411

斎藤 達哉 (SAITO, Tatsuya)  
専修大学・文学部・教授  
研究者番号：90321546

田坂 憲二 (TASAKA, Kenji)  
慶應義塾大学・文学部・教授  
研究者番号：70136406

田村 隆 (TAMURA, Takashi)  
東京大学・大学院総合文化研究科・講師  
研究者番号：70432896

中村 一夫 (NAKAMURA, Kazuo)  
国土舘大学・文学部・教授  
研究者番号：50407194

村上 征勝 (MURAKAMI, Masakatsu)  
同志社大学・文化情報学部・教授  
研究者番号：00000216

横井 孝 (YOKOI, Takashi)  
実践女子大学・文学部・教授  
研究者番号：60166866

上野 英子 (UENO, Eiko)  
実践女子大学・文芸資料研究所・教授  
研究者番号：60205573

吉野 諒三 (YOSHINO, Ryozo)  
統計数理研究所・データ科学研究系・教授  
研究者番号：60220711

後藤 康文 (GOTO, Yasufumi)  
北海道大学大学院・文学研究科・教授  
研究者番号：50215505

坂本 信道 (SAKAMOTO, Nobuyuki)  
京都女子大学・文学部・教授  
研究者番号：20249379